

# ドリーネを駆け抜けた

世界学生オリエンテーリング選手権大会 2006 スロバキア

JOA 強化委員会  
尾上秀雄

この夏の世界大会シーズンを締めくくったのは、ユニバーシアード。次世代のエース達がドリーネの森を駆け抜けた。

## ユニバーシアード

8月15日～19日、スロバキア第2の都市コシチェにおいて世界学生オリエンテーリング選手権大会が開催された。日本からは西尾、坂本、皆川の3名のユニバー経験者を含む男女各6名の代表選手が参戦した。

大会は、2004年の前回大会からスプリントが加わった代わりにミドルの予選がなくなったため、4日間連続で決勝レースが行われるという厳しい日程となっている。そのためリレーでのパフォーマンスを考え個人種目は最大2つまでに絞って万全を期して臨んだ。



## レース上位は有名選手

ユニバー年代の選手になってくると、すでに世界選手権に出場している選手も多く含まれている。今年は例年と異なりデンマークでの世界選手権(WOC2006)が、ユニバーより先に開催されたわけだが、そこに出場した選手がそのままユニバーでも上位を占めるという結果だった。その中でも女子ではチェコのDana Brozkova、男子ではリトアニアのSimonas Krepstaの活躍が顕著で、最後の個人表彰を独り占めしていた。

## 特徴的なドリーネ地形

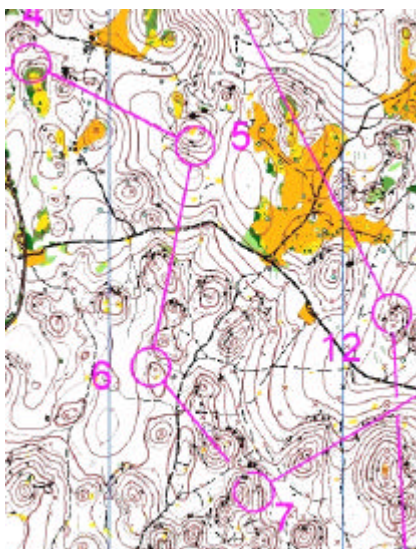
ロングとリレーはカルスト台地で行われたのだが、石灰岩が雨で浸食されてきた大小さまざまなドリーネ(凹地)に悩まされた選手が多かった。

- ・ドリーネとドリーネの間の地形が地図から読み取りにくい。
- ・ドリーネ周辺の岩石地は走りにくいので岩石地を避けるルートチョイスが必要。
- ・ドリーネが地図表記より深く感じる。
- ・どちらが高いかが分かれば何とかなる。
- ・ドリーネを巻くときには方向に気をつける。
- ・ドリーネは一度現在地が分からなくなったらリロケートが難しい。
- ・ドリーネがどこからどこまでなのか分からなかった



ドリーネのへこみ

ドリーネは、違和感があっても対応に苦労した人と、特に問題にならず対応できた人に分かれた。異なるトレインに対峙したときに、どれだけ自分が基本に忠実にオリエンテーリングをやってきたかが分かるとも言える。やはりやれることは基本の組み合わせでしかないのだ。



ロング競技のトレインは典型的なドリーネ地形。

ロングでは、坂本が132%の好タイム。早くから現地入りして練習した効果が現れた形である。小野田が140%でそれに続いた。優勝は男女ともチェコが獲得し、日本選手と同じ建物の同じフロアで毎日顔をあわせているチェコ選手が2倍も3倍も大きく見えた。

### ロング競技 女子 8.5km 290m

1	Dana B.	CZE	0:53:22	100%
2	HelenBridle	GBR	0:56:58	107%
3	Larisa S.	RUS	0:58:17	109%
53	皆川美紀子	日本	1:17:06	144%
63	森澤寿里	日本	1:33:15	175%
66	石山佳代子	日本	1:55:48	217%
68	朴峠周子	日本	2:01:27	228%

### ロング競技 男子 13.9km 485m

1	MichalSmola	CZE	1:12:31	100%
2	MatthiasMerz	SUI	1:14:36	103%
3	Oystein K.O.	NOR	1:15:45	104%
62	坂本貴史	日本	1:35:33	132%
68	小野田剛太	日本	1:41:37	140%
71	高橋雄哉	日本	1:48:25	150%
73	茂木堯彦	日本	disq	

## ミドルで米谷が快走

ミドル競技のトレインにはドリーネは無く、日本でもありそうな普通のトレイン。スタートがまったくの牧草地のようなところだったが、フィニッシュエリアがちょっとした村の中に作られていてびっくり。



ミドル競技のトレインは普通の地形だが難易度は高い

ミドル1本に準備してきた西尾は、日本人ベストタイムながら不本意なレースで「4年掛けてこれか！」と残念さを隠せない。「アグレッシブに走れたことは評価できる。」反面、「ナビゲーションがうまくいかなかった。レースとしてトータルでまとめる練習が必要だ。」と早くも次への課題を口にしていった。

ミドルで好走したのは米谷だった。トップ比 132%の 47 位は魅力的な数字だ。ただし彼女自身も「ほぼバックだった。」というようになりに恵まれた展開だったようだ。

記録を追うと、まず2分後に1位選手、8分後に2位選手がスタートしているのだが、まずその1位選手に3~6番辺りを引っ張ってもらい、7番~11番は2位選手に乗り換えという感じになっている。この走りを通じて「トップ選手の速さを体感できた。脱出の早さもまったく違い、コンパスを見る回数など方向維持のやり方がまったく違う。」のだそうだ。この経験が次にどんな形で彼女のレベルアップにつながるのか楽しみである。



ミドル好調の米谷

ミドル競技女子 4.6km 160m

1	Line Hagman	NOR	0:31:30	100%
2	Larisa S.	RUS	0:31:43	101%
3	Maria R.	FIN	0:32:08	102%
47	米谷法子	日本	0:41:29	132%
65	石山佳代子	日本	0:52:33	167%
67	千葉光絵	日本	0:59:38	189%
68	森澤寿里	日本	1:01:25	195%

ミドル競技男子 6.2km 230m

1	Simonas K.	LTU	0:32:37	100%
2	Philippe A.	FRA	0:34:26	106%
3	Stig Alvestad	NOR	0:34:50	107%
73	西尾信寛	日本	0:50:01	153%
76	今井直樹	日本	0:52:19	160%
78	茂木堯彦	日本	0:54:26	167%

スプリントはトップ比 110%

スプリント競技のコースは、予想どおり建物に挟まれた中庭のようなところからアーケードのトンネルを通過していきなり目抜き通りに出てスタート。数日前に散歩をして撮りまくった写真にコントロールになった場所がいくつも写っていた。予想が大当たりだ。



スプリントのコース

フィニッシュエリアに移動した時には、皆川がもうフィニッシュしていて、6人の中では暫定トップだという。一番上に日の丸が載っているリザルトボードをバックに記念写真を撮る。結局最後までそれほど落ちずにトップ比110%の19位だった。



男子では高橋が同じく111%ということで、スプリントはこれから110%が一つの目標数字になりそうである。男子の方は層が厚く高橋の順位は42位だった。

実は坂本も高橋とほぼ同タイムでフィニッシュしていた。しかし速報ではベナ1。調べてもらおうとラスポの2つ前コントロールの記録が無いという。本人に聞くと「観客の歓声がうるさくて音が聞こえなかった。光は見えていない。」という。イベントセンターに戻ってから計算センターの責任者にユニットの方を調べてもらったが記録は無かった。不完全パンチのベナはひっくり返らなかった。



スプリントを走る高橋雄哉

コースは大半が市街地部分で、一部公園に入って戻ってくるというもの。途中、噴水の脇にコントロールが設置されていて、地図ビニを外して走っていた今井は、噴水で地図を濡らしてしまうというハプニングもあった。



ウォーターコントロール

### スプリント競技 女子 2.7km 10m

1	Dana B.	CZE	14:20.1	100%
2	Seline S.	SUI	14:25.5	101%
3	Michela G.	ITA	14:47.8	103%
19	皆川美紀子	日本	15:48.3	110%
48	朴峠周子	日本	17:26.2	122%
54	千葉光絵	日本	19:01.3	133%

### スプリント競技 男子 3.3km 10m

1	Oystein K. O.	NOR	14:07.1	100%
2	Simonas K.	LTU	14:19.3	101%
3	Fabian H.	SUI	14:22.6	102%
42	高橋雄哉	日本	15:43.2	111%
59	今井直樹	日本	16:52.2	119%
	坂本貴史	日本	disq	

## リレー

ユニバーのリレーは4人リレーである。4人であること以外にも1、2走の距離が3、4走より長いという要素があり、メンバー選考もさることながら走順を含めた作戦が重要であった。男子は国内合宿の時から選考レースや話し合いを通じて方針が固まっていた。女子は皆川の長期遠征や石山の怪我等があつてなかなか決まらず、現地トレキャン中の話し合いで最終決定した。リレーもドリーネ地形を含むコースであり、波乱が予想された。

まず女子は WOC にも出場したリトアニアのインドレ選手が先頭を引く形でスタート。しかし中間に現れたのはロシアとハンガリー。集団はばらけている。そのまま1走はハンガリーが逃げ切るという意外な展開。

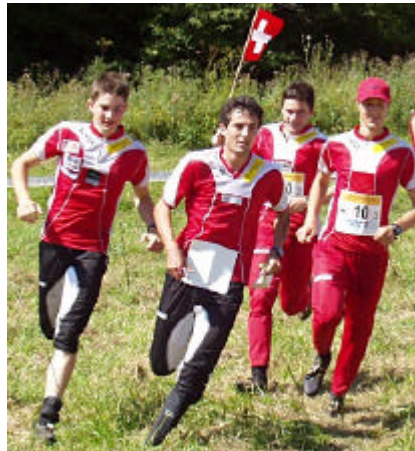
日本の1走の皆川は序盤で大きなミスをして遅れてしまい、中間ではまったくの一人旅となっている。

ここでハプニングが起きた。中間を早々と通過した優勝候補のチェコの1走が後半で迷ったのか帰って来ない。チェコのヴラチョバ女子コーチが心配する中を、トップから10分も遅れて帰ってくる。致命的なミスだ。こんなこともあるのかと改めて怖さを感じる。

日本は朴峠、千葉、森澤とつないだがリレーにはならず、結局3走時点でウイニングランに間に合わないという厳しいレースになってしまった。最後は4人がきっちり走ったイギリスがスイス、フィンランドを押さえて優勝。チェコはアンカーのダナが10位から7位に持ち上げる快走を見せたが、それが精一杯で入賞を逃した。

男子は、1走の坂本が中間ではトップから1分遅れの集団の中で通過し、大いに期待が膨らむ。後半も粘って16位で2走にタッチ。ユニバー3回目の西尾に期待が掛かるが痛恨のミスで

20位まで順位を落とす。3走の高橋が快走して1つ順位を上げるが、4走茂木も不発で結局21位に終わり、昨年順位には届かなかった。



リレー男子、スイスのウイニングラン

### リレー競技 女子

1,2 走/4.9-5.1km	3,4 走/4.1-4.3km
1 イギリス GBR	2:22:39 100%
2 スイス SUI	2:22:46 100%
3 フィンランド FIN	2:23:03 100%
15 日本 JPN	3:37:59 153%
1 走 皆川美紀子	0:46:57
2 走 朴峠周子	0:57:28
3 走 千葉光絵	0:59:27
4 走 森澤寿里	0:54:07

### リレー競技 男子

1,2 走/7.2-7.4km	3,4 走/6.0-6.2km
1 スイス SUI	2:24:32 100%
2 スロバキア SVK	2:25:55 101%
3 ノルウェー NOR	2:25:56 101%
21 日本 JPN	3:24:49 142%
1 走 坂本貴史	0:44:11
2 走 西尾信寛	1:02:41
3 走 高橋雄哉	0:42:52
4 走 茂木堯彦	0:55:05

## ユニバーの評価

ユニバーは力を入れている国とそうでない国があることがわかった。特にスウェーデンは国内選考無しで出場しているということで、個人戦では男子ミドルの13位が最高で、女子はリレーに出場していなかった。従ってトップ選手はいるものの、中間層が薄いのは否めないで、順位よりトップ比を評価した方が良さだろう。

そういう頭でリザルトを眺めてみると坂本のロング 132%、米谷のミドル 132%、皆川と高橋のスプリント 110%、111%はそれぞれ評価できる結果だろう。

今回のユニバーに向けて、各選手はそれぞれ強い思いを持って臨んだことだけは、間違いのない。特に坂本は1ヶ月前からの現地入りし、インターネッ

トを通じてまだ日本にいるチームメイトにトレーニングトレインの写真や生活関連の情報を流してくれた。私は2002年から3回連続してオフィシャルをしたわけだが、今回は1人だけだったので、特にこういう事前情報が手に入ったことは大きかった。全員が現地入りした時に感じた安心感は、彼の活動によるところが大きい。

その他にも、皆川は3ヶ月の長期遠征、朴峠も WOC からの連戦、今井、茂木、高橋らは、坂本と一緒にスロベニアでの大会に参加してドリーネ地形の練習をしてから現地入りするなど、各人が時間を掛けて準備したことが特徴的である。

世界選手権では結果がすべてでありプロセスは関係ないが、ユニバーではこの世代での取り組み姿勢は非常に重要で、次世代を担うユニバー層の今回の取り組み姿勢は、将来への期待につながるものであったと言える。

遠征には私が同行したが、このユニバーチームを送り出すに当たっては加賀屋博文氏、西脇正展氏による継続的な活動があった。7回開催した強化合宿もその一つである。その他にも日本学連技術委員会の方々を初めとする多くの方々にご支援をいただいた。この場を借りて感謝したい。

## 2008 エストニアに向けて

今回は2008年にエストニアで開催される。JWOC2003の時と同じ宿舎になる模様である。JWOCでは見通しの悪いやぶや湿地に悩まされた選手が多かったので、挑戦しようと思っている選手は、今年のドリーネのように湿地対策を考える必要があるかもしれない。目標にするに足るすばらしい大会になるはずなので、多くの学生に挑戦して欲しい。  
(尾上秀雄)